

IARLD国際学習障害研究アカデミー年次会議に参加して ー設立25周年記念国際会議（ベルギー）ー

柘 植 雅 義

（文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課）

1. はじめに

2001年6月28日から30日にかけての3日間、ベルギーのアントワープで、国際学習障害研究アカデミー(International Academy for Research in Learning Disabilities: IARLD)の設立25周年記念国際会議が開催された。

この会議は、脳障害研究で世界的に知られたWilliam M. Cruikshank（ウィリアム・クリュックシャンク）らが、1975年頃に学習障害研究を国際的なレベルで進める体制の必要性について検討を始めて、設立したアカデミーIARLDが開催する会議である。

IARLDのメンバーは、世界各国で学習障害に関するさまざまな学問領域で研究を積極的に進めている研究者で、現在では、北米を中心に、南米、ヨーロッパ、北欧、アジア、オセアニア等から30か国に近い国からメンバーを集めている。また、メンバーの研究領域は、学習障害研究のさまざまな内容や方法をカバーする。

今年のこの会議は、ヨーロッパ地区における学習障害の会議である、ヨーロッパ学習障害 कांग्रेस (European Congress on Learning Disabilities) との一部同時開催ということで、基調講演は、ヨーロッパ地区からの参加者を中心に世界各国からの参加者が参加した。

また、IARLDの設立25周年を記念する会議ということで、記念本の出版の紹介もなされた(Hallahan & Keogh, 2001)。これは、学習障害研究のこれまでの成果の集約及び最新の成果と、アメリカ、カナダ、イギリス、オランダ、ドイツ、日本、スカンジナビア、南アメリカ等世界各国の学習障害への対応の状況が紹介されている。このような企画の出版は、IARLDの設立目的に大いに沿うものである。

2. 会議の概要

参加者：

すべてIARLDのメンバーで、その専門は、教育学、特殊教育、教育政策学、言語学、心理学、医学等関連分野で、この中から順次発表がなされた。

参加国：

アメリカ、カナダ、オーストラリア、中国、日本、チェ

コスロバキア、イスラエル、オランダ、イギリス等から参加があった。その中でもアメリカからの参加者が特に多かった。また、ヨーロッパ学習障害 कांग्रेस との共催プログラムでは、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、チェコスロバキア、オランダ、ノルウェー、スウェーデン等、ヨーロッパ地区から幅広い参加があった。

プログラム：

2001年6月28日(休)：

基調講演、研究発表、全体講演。この他に、昼食(Luncheon)、午前と午後のコーヒーブレイク(Coffee/Tea)は、オープンスペースで参加者が自由に意見交換などができるセッティングになっていた。

2001年6月29日(金)：

シンポジウム、研究発表、ポスター発表。昼食(Luncheon)、午前と午後のコーヒーブレイク(Coffee/Tea)。

2001年6月30日(出)：

シンポジウム、講義、記念出版の紹介、昼食を取りながらの情報交換と協議(Luncheon)、午前のコーヒーブレイク(Coffee/Tea)。どのプログラムも、発表の時間等に十分な余裕をとってあり、かなり突っ込んだ協議がなされた。また、世界各国からの参加者が集まっているということで、それぞれの研究発表のテーマについて、世界各国の視点から協議がなされるというスタイルで進んだ。

会場の様子：

会場となったZoo कांग्रेस センターは、アントワープ中央駅のすぐ隣であるにもかかわらず、広大な敷地の動植物園内に位置する複合的な会議施設である。1日目は、ヨーロッパ学習障害 कांग्रेस との一部のプログラムが共同ということで、大ホールとその周辺の会議室で開催。2日目と3日目は、IARLDのみの独立した会議ということで、Zooの中のカンファレンスルームで行われた。歴史的な建造物で、カンファレンスルームには、多様な植物がアレンジされ、天井からは恐竜の実物の骨像が吊るされているという、なんともZooならではのエキゾチックな会場であった。

3. 研究発表

特にIARLD側からの研究発表をいくつか紹介する。

(1)「カレッジ卒業後8～15年後の学習障害のある成人：彼らはいかに公正か？ (Adults with Learning Disabilities 8-15 Years after College: How Do They Fare?)」

Susan A. Vogel (Illinois University, USA)

学習障害のある人（50名）とその学習障害のないクラスメート（41名）に対して、彼らが大学を卒業して8-15年後にインタビューがなされた。調査項目は、教育の達成、雇用率、就業状況、仕事への満足、仕事の継続、年収であった。その結果、上記の調査項目については、学習障害のある人となない人の間で有意な差はなかった。さらに、これらの維持には、大学在学の段階からのキャリアカウンセリングや、適切で満足なフルタイムの雇用を見つけるための困難に対する継続的な援助が必要であり、さらには、ADAに関する情報提供やカウンセリングへの援助が必要である、等が検討された。

(2)「発達課題をもつ幼稚園児のヤングアダルトまでの研究：20年の長期フォロー研究 (A Study of Preschool Children with Developmental Problems as Young Adults: Twenty-Year Longitudinal Study)」

Barbara Keogh & Lucinda Bernheimer (UCLA, Los Angeles, USA)

年少の頃のリスクのサインが、その後の認知面や教育面、さらには社会的／行動的な困難に結びつくことがしばしば見られる。この研究では、30名の何らかのリスクのあった子どもを、幼稚園時代からヤングアダルト（ここでは23歳まで）までフォローした。まず、ヤングアダルトの段階での個人的な特徴、生活・仕事・教育等の状況等が記述され、彼らの能力や問題が同定された。次に、幼稚園時代に見られた種々のリスクの指標と現在の状況との対応が検討された。

(3)「仕事に就くということを越えて：障害のあるアメリカ人法の時代における学習障害のある従業員 (Beyond Job Entry: Employees with Learning Disabilities in the Americans with Disabilities Era)」

Paul Gerber (Virginia Commonwealth University)

障害のあるアメリカ人法 (The Americans with Disabilities Act (ADA), PL101-336) は、理論的には、仕事の場所へのアクセスや雇用の機会を提供している。しかし、学習障害のある成人への調査の結果、実際には、学習障害のある人の76%はADAは使えないと考えていることが分かった。とくに、仕事に就くという段階では、めったに使えない、と答えていることが分かった。

(4)「学習障害のある生徒における学業の自己認知、努力、そして方略の使用：介入のインパクト (Academic Self-perceptions, effort, and Strategy Use in Students with

Learning Disabilities: Impact of Intervention)」

Lynn Meltzer, Tamar Katzir-Cohen, Lynne Miller, & Bethany Roditi (Research Institute for Learning Disabilities, Tufts University, USA)

この研究では、6か月間の介入プログラムの前と後で、学力の自己認知や達成、努力、方略の使用の3つの観点でどのような変化があったかを明らかにすることが目的であった。260人の学習障害の生徒、307人のアベレージの生徒が調査対象になった。その結果、いずれの観点においても、学習障害のある生徒にとって変容が見られたことが報告された。そして、学習障害のある生徒のこれらの観点をさらに高めるための研究の在り方が検討された。

(5)「多様な能力の生徒における概算方略とその遂行の認知 (Estimation Strategies and Perception of Effort in Students of Varying Ability)」

Marjorie Montague

学習障害のある生徒、ギフティットで学習障害のある生徒、平均的な学習達成の生徒、そして、ギフティットの生徒の4者について4年生、6年生、8年生の150名の生徒について調査がなされた。その結果から、概算方略が生徒の発達段階や能力のレベルにいかに関与するかを検討した。またその際には、インタビューによる質問分析も併用され、生徒自己報告システム (Student Self-Report System (SSRS)) が活用された。項目としては、計算結果を教師にわたす前にミスがないかチェックする、問題の絵を描けば文章題を解くことができる、文章題を解き始める前に解いていく順番の計画を立てる等で、5段階尺度からチェックするものである。

(6)「学習障害のある生徒の自己認知の役割、モチベーション、そして方略の使用 (The role of Self Perceptions, Motivation, and Strategy Usage in Students with Learning Disabilities)」

Margo A. Mastropieri (George Mason University, VA, USA)

この報告では、学習態度、学習の遂行状況の自己認知、学習へのモチベーションに関する最近のいくつかの方略研究を検討した。その結果、いくつかの共通的な知見が示された。その一つとして、生徒が学習により成功するようになると、付随的に、楽しく学習に参加したり学習が楽しいものと理解したりするように動機づけられるようになることが分かった。

(7)「学習障害のある学業が高い生徒と低い生徒における自己認知、方略の使用、及び学業達成 (Self-Perceptions of Effort, Strategy Use, and Achievement in High and Low Achieving Students with Learning Disabilities)」

Lynn Miller, Tamar Katzir-Cohen, & Lynn Meltzer (Research Institute for Learning Disabilities, Tufts University, USA)

方略の使用と能力の自己認知の状況が、学力達成のレベルや学力の成功の視点から、学習障害のある生徒とない生徒で比較された。その結果、学習障害のある生徒は、学習障害のない仲間と比べて、一貫して低いレベルであることが明らかになった。しかし、学力の高い生徒は、学習障害のあるなしに関わらず、方略の使用や学力達成で同じようなプロフィールを示すことが明らかになった。さらに、生徒の自己報告が教師による評価と比較された。その結果、教師は、学力達成の高低に関わらず、学習障害のある場合とない場合で方略の使用においてより有意な差があると報告したとしている。これらのことから、学習障害のある生徒の自己認知と方略の使用について総合的に検討された。

(8) 「高等学校の移行期における学習障害のある青年の社会的情緒的調整 (The Social-emotional Adjustment of Adolescents with Learning Disabilities High School During Transition Periods)」

Hana Tur-Kaspa (Tel Aviv, Israel)

中学校への入学段階と卒業間近の段階で、キブツ環境で生活している学習障害のある生徒とない生徒との社会情緒的調整を調査した。対象者は、統制群と対照群共に約100名が参加した。その結果、特に、学習障害のある生徒は、社会的スキル、主張、自己コントロール、及びより高次の行動様式（客観化したり主観化したりすること）等において低い水準であることが明らかになった。

(9) 「小学校の算数文章題における言語の首尾一貫性と適切性の効果 (Effects of Consistency and Adequacy of language on Solving Elementary Mathematics Word Problems)」

Che Kan Leonge & W. D. Jerred (Saskatchewan, Canada)

小学3～5年生が算数文章題の解決の仕方について調査した。その際、特に、言語の首尾一貫性と適切性という2つの視点から、文章題に埋め込まれた言語的な情報に注目した。そこで、首尾一貫した問題とそうでない問題、また、十分な情報だけが含まれた問題、情報が不十分な問題、そして、余分な情報が含まれた問題を用意して小学生がいかに解決するかを検討した。その結果、それらの問題の解決の状況は、生徒の能力に左右されることが多いことが示された。

(10) 「ディスレクシアと音楽：音楽的タイミングスキルの測定 (Dyslexia and Music: Measuring Musical Timing Skills)」

Katie Overy, Angela Fawcett, Rod Nicolson, Eric Clarke, Fleur Hubert & Marisa Kilbun (Sheffield, England)

ディスレクシアの人は楽器を演奏することを学ぶことに特に困難を示すと言われ、基礎的な研究がいくつかなされ

てきた。ここでは、ディスレクシアの人がリズムを取ることの困難だということを明らかにするために行われた研究が報告された。その結果、メロディーに関するテストでは特に有意な差は見られなかったものの、リズムに関するテストとタイミングに関するテストでは、ディスレクシアの人は有意な差があることが分かった。

(11) 「日米における学習障害のある生徒への教育に関する国際比較調査：教育政策、教育実践、及び学術研究の視点から (International Comparative Research on Education for Students with Learning Disabilities in Japan and USA: Viewpoints of Education Policy, Education Practice and Academic Research)」

柘植雅義 (国立特殊教育総合研究所)

学習障害に関する両国の学習障害関連の教育施策の経過と現状、中学校と高等学校における学習障害への教育についての両国の通常学級・リソースルーム（日本では通級指導教室）・特殊学級の教師及び校長への質問紙調査（日本側約500名、アメリカ側約100名）の結果、さらに両国の学習障害関係の学術誌に取り上げられた研究論文の比較分析という、教育政策、教育実践、及び学術研の3つの視点から日米両国の学習障害への対応の特徴を総合的に検討した。その結果、この調査では、教育実践及び学術研究について、両国で大きな特徴の違いがあることが明らかになった。

(12) 「シンポジウム：学習障害／ディスレクシアのある成人に関する国際比較研究 (Symposium: International Comparative Research on Adults with Learning Disabilities / Dyslexia)」

Susan A. Vogel (Illinois, USA), James Chapman (New Zealand), Wied Ruijssenaars (Leiden, Netherlands), & Pol Ghesquier (Leuven, Belgium)

国際的な視点から学習障害／ディスレクシアの問題の大きさと複雑さの理解と対応を検討することを目的として行われた。その材料として、ベルギー、カナダ、ドイツ、イギリス、イスラエル、ニュージーランド、オランダ、スイス、アメリカの9か国の共同で行われた成人を対象とした国際リテラシー調査 (IALS) の結果が報告された。この調査では、定義、一般市民の周知、政策、教育法、特殊教育の歴史、読みの方法と教師教育、今後の方向等の要因で分析された。

4. おわりに

本大会での研究発表の特徴をまとめると、次の6点である。

①成人に関する研究

アメリカ等諸外国における学習障害研究では、学齢期を中心にしながらも、成人を対象にした研究が多いことが特徴の一つである。大学や大学院での教育的支援やその後の就業の状況の調査など、その内容は多岐にわたる。この会議でも、学習障害のある人のカレッジ卒業後の就業状況が学習障害のない人の状況と比べてどのような特徴があるのかが検討された [(1)]。また、就業している学習障害のある人にとって ADA がどう生かされているか、どう使っているかを明らかにしようとした興味深い研究もあった [(2)]。後期中等教育を終えた後の進学や就業の状況に焦点を当てた研究の豊富な蓄積をこの会議でも強く感じた。

②長期フォローアップ研究

学習障害研究に限らず事例の長期にわたるフォローアップ研究もアメリカでは多くなされてきている。幼稚園児からヤングアダルトまで20年の間フォローした研究では、幼稚園児のような早い時期からの介入の可能性と重要性が強調された。その際には、教育、心理、医療、福祉等分野の関係者による学際的なプロジェクトが求められるであろう [(2)]。また、カレッジを卒業後、8年から15年を経過し、就業している学習障害のある成人が他の成人と比べて、職種や年収などでどのような特徴があるかを明らかにした研究は大変興味深い [(1)]。早期のリスクが成人になってどのような影響をもってくるのかを明らかにしたり、同じような学生生活を経験した学習障害のある人となない人に対してその後の何年かの就業生活の状況を比較したりするような、大規模な研究の意味を改めて感じさせた。

③本人が自ら参画する教育の在り方

自己知覚、自己コントロール、自己有能感など、「自己・・・」という言葉がこの会議中何度も聞いた。これも、近年参加した国際会議では中心的な話題の一つになっている。努力・方略使用・学業の自己知覚と題された一連の研究発表では、それらを向上させるための有効なプログラムの検討、学習の成功と学習へのモチベーションの関連性の検討、そして、学習障害のない生徒と比べてこのような自己知覚が低いことの検討が行われた。知的に遅れのない学習障害のある生徒が自らの学習の状況や問題解決時に行った方略等について認識しその後のありようを決定していくというような、自ら参画する教育環境の検討は、学習障害という障害に特に求められる研究テーマであり、今後も、積極的な研究が各国で続けられるであろう。[(4)(5)(6)(7)]

④各教科指導の在り様に示唆を与えるような基礎的な研究

算数（数学）や音楽のような課題への基礎的な研究も学習研究分野で初期から見られる。算数（数学）の学習では

文章題に困難を示す場合が多く見られるが、問題に含まれる言語の首尾一貫性と適切性という観点からの実験研究は、文章題を作成する際の語の用い方や、つまづきの分析（誤答分析）に示唆することは多いであろう。一方、音楽では、いわゆる不器用ということから楽器演奏に困難を示す場合が報告されている。その原因の一つとして、学習障害のある生徒にとってのリズムを取ることの困難性について、他の音楽の3要素との比較から検討された。その困難性のメカニズムの解明は、楽器演奏を含めた不器用への支援の在り方を示唆してくれるであろう。このような各教科指導の有り様に示唆を与えるような基礎的な研究の蓄積は今後とも継続してなされていくことであろう。[(5)(9)(10)]

⑤学習障害とギフティットの関係に関する研究

ギフティット（Gifted）に関する研究は、アメリカでは、特殊教育（Special Education）の研究が始まった初期の頃から継続して行われてきている。この会議では、ギフティットの生徒や、学習障害でギフティットの生徒の特徴が、ギフティットではない学習障害のある生徒やアベレージの生徒の状況との対照群として用いられた。学習障害を総括的に扱うのではなく、知的にアベレージの学習障害とか、知的に優れている学習障害というように、知的発達の状況等、より詳細な視点から学習障害像を検討することの重要性を感じさせる研究である。[(5)]

⑥国際比較研究

個人や国を越えて、共通する問題を多国間で国際比較するという研究は、自国の教育の現状をより広い視野から客観的に見る上で、また、その上で将来の教育政策のありようを探る上でも重要である。その際、各国の教育政策、教育実践、学術研究の3つの視点から総合的に行うことが大切であろう。また、成人のリテラシーという特定の領域について、多国間（この会議では9か国）で共同して調査を進める試みは、高く評価してよいであろう。今後は、他国の表面的な状況の把握に留まらず、これらの研究のような総合的な視点によるものや、特定領域にシャープに視点を当てるような各国間の比較研究が求められる。[(11)(12)]

注：この会議への参加時は、筆者は国立特殊教育総合研究に所属しており、その後2001年10月から文部科学省に異動した。

文 献

Hallahan D. P. & Keogh B. K. (2001) Research and Global Perspectives in Learning Disabilities: Essays in Honor of William M. Cruikshank. Lawrence Erlbaum Associates (LEA).

Short Report for IARLD International Conference 2001 in Antwerp, Belgium: In Twenty Fifth Anniversary of International Academy for Research in Learning Disabilities

TSUGE Masayoshi

(Ministry of Education, Special Support Education Division)

Abstract:

This is a short report for attending a international conference that was held from June 28 (Mon.) to 30 (Wed.) , 2001 at Antwerp in Belgium. The annual conference was memorial conference after establishing International Academy for Research in Learning Disabilities (IARLD) twenty five years ago. And the academy was established by William M. Cruikshank for the purpose of developing research in Learning Disabilities under world wide partnerships and international viewpoints. In this year conference, following Issues were presented and discussed: Research for Adults with Learning Disabilities, Longitudinal Study for Persons with Developmental Problems, Self-Perceptions and Self-Management by Persons with Learning Disabilities, Basic Research for Developing Teaching Methods for Math and Music, Research on the Relation between Learning Disabilities and Gifted, and International Comparative Research for Learning Disabilities. And this year conference was held jointly

sponsored by European Congress on Learning Disabilities.

要約の和訳：

これは、2001年6月28日から30日にかけて3日間、ベルギーのアントワープで開かれた学習障害に関する国際会議に参加した際の報告である。この会議は、国際学習障害研究アカデミー（IARLD）が設立後25周年をむかえたことを記念して開かれた年次国際会議であった。このアカデミーは、各国間の連絡・調整を密にし国際的な視野から学習障害研究を進展させようとする目的などで、William M. Cruikshank らによる働きかけで設立されたものである。今年の会議では、学習障害のある成人を対象にした研究、学習障害等を含む発達障害のある人の長期フォローアップ研究、学習障害のある本人が自ら評価し参画する教育の在り方、各教科指導の在り様に示唆を与えるような基礎的な研究、学習障害とギフティットの関係に関する研究、学習障害に関する国際比較研究の重要性等について、協議がなされた。また、今回の会議は、ヨーロッパ学習障害コンGRESと一部のプログラムが共有された。